

普通の日本人にとつて

村上春樹氏は1979（昭和54）年、『風の歌を聴け』で群像新人文学賞を受賞し、文壇にデビューした。それから四半世紀以上に及ぶ執筆活動を経て、作品が世界の30を超える言語に翻訳される今日に至るまで、村上氏は日本の文学シーンの前景に存在し続けている。このことは、もはや常識に属する話であろう。しかし、しばし立ち止まって、では、「作家・村上春樹」はこの間、単に一樣な（平板な）存在としてあり続けてきたのか、例えば「人気作家」なり「ベストセラー作家」のようなものとして表象され、受容されてきたに過ぎないのか、と問い直してみると、決してそうではないはずなのである。

文学そのものとは少し離れたところから考えたい。つまり、必ずしも文学愛好者ではない、ごく普通の同時代の日本人にとつて「村上春樹」とはどのような存在であつたのか。これを、文芸誌などの専門メディアを除く一般の新聞・雑誌での取り上げられ方、いわばメディアにおける表象の変遷を通して概観してみたい。それによって、「村上春樹とその時代」の一端を素描してみたいというのが、本稿の狙いである。結論を先に述べる形になるが、ここではメディアに表象された「村上春樹」像を、次の5つほどの時期に分けて考えていくことにする。第1期は79年のデビューから84年まで、第2期が谷崎潤一郎賞受賞の85年から大ベストセラーとなつた『ノルウェイの森』刊行の87年まで、第3期が88年から読売文学賞受賞の96年まで、第4期は『アンダーグラウンド』を刊行した97年から

『神の子どもたちはみな踊る』刊行の2000年まで、そして第5期は01年以降、現在に至る時期である。

静かなデビュー

さて、一般紙に村上氏が初めて登場したのは前述の79年、第22回群像新人文学賞の受賞報道が最初である。同賞の選考委員会は4月9日に行なわれ、『産経新聞』は早くも翌10日付朝刊でこれを報じている。扱いは1段、いわゆるベタ記事であつた。他紙も同様の記事を数日後までに掲載している^③。一般紙上では、他の多くの新人作家と変わらぬ小さな一歩からスタートしたことが確認できる。ただし、このとき、新聞では「自営業」と記されただけの職業に注目した雑誌があつた。「群像新人文学賞」村上春樹さん（29歳）は、レコード三千枚所有のジャズ喫茶店主^④のタイトルで、見開き2ページのイン

同時代現象としての「村上春樹」

おおい こういち
大井浩一

毎日新聞学芸部記者

注

(1) いうまでもないが、この時代区分はメディア表象としての「村上春樹」像に関するものであって、村上氏の文学活動そのものの区分とは必ずしも一致しない。

(2) 以下で引用する新聞・雑誌記事は、あくまで筆者の目に付いた範囲のものにとどまる。それゆえ見落としも多いと思われるが、ご容赦願いたい。なお、執筆に当たっては、毎日新聞情報調査部の記事資料を参考にした。感謝を記しておきたい。

(3) 新聞記事では、受賞者の名前が「村上春樹」となっていた。受賞作を掲載した「群像」（同年6月号）では「村上春樹」であり、事情は不明だが、ごく一時的にせよペンネームが使われたことがわかる。ちなみに、「評論」が本名である。同賞はこの年、評論部門の当選作がなく、2点選ばれた優秀作が富岡幸一郎、宇野邦一といふいずれも批評家としてその後活躍する二人のものだったことも含め、コアなファンには周知のことだろう。

↓『朝日ジャーナル』1984年5月25日号の「若者たちの神々」。当時、同誌編集長だった筑紫哲也氏が各界の新進気鋭のクリエイターにインタビューしたシリーズに、村上春樹氏が登場した

デビュー記事を掲載した同年5月4日号の『週刊朝日』である。ぎつしり詰まったレコード棚の前に立つ村上氏の写真付きで、「変わり種作家が続出す現代文学風景の中に、またひとり異色新人の登場である」と書いている。

よく知られているように、村上氏は2年後の81年、専業作家になることを決意し、店を人に譲る。この時点で小説は『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』の2作しか刊行されていないが、すでに川本三郎氏、吉本隆明氏、月村敏行氏といった批評家らが村上氏の独自の作風に注目し、若い文学ファンの間で話題を集め始めていた。まだ一般紙の記事は少ないなかで、『朝日新聞』80年5月17日夕刊は、「若い世代に静かな人気作家」（見出し）というタイムリーな小インタビュを掲載している。『朝日』同年11月12日夕刊に、村上氏の寄稿「フィツジエラルドの魅力」が載っているのも目を引く。

文学界に新風を送る小説家

次に一般紙誌が報じるきっかけになったのは、82年の第4回野間文芸新人賞受賞である。受賞作は3作目の長編『羊をめぐる冒険』（「群像」8月号。単行本は10月刊）。ただし、12月に行なわ

れた贈呈式の記事では、同時に野間文芸賞を受けた小島信夫氏の陰に隠れる形になっていて、今見ると意外な感じもする。一方で、このころは村上氏の「独特のライフスタイル」に関心を向けた記事が目立つ。

例えば、『産経』83年2月20日朝刊は、村上氏が当時住んでいた千葉県船橋市の自宅を記者が訪ね、裏庭を掘り起こしては埋める「穴掘り」好きな人として氏を取り上げている。また、『毎日新聞』同年5月1日朝刊は、「テレビも車も持たず、海外にも行かない」「技巧的の生活を楽しむ作家」（見出し）

として村上氏を描く。二つの記事から読者が受け取ったであろう人物像にはやや隔たりがあるものの、「期待の若手作家」「文学界に新鮮な風を送る小説家」といった表現で若手の有望作家と位置づけている点は共通している。

しかし、この時期で最も重要なのは、『朝日ジャーナル』84年5月25日号の連載インタビュシリーズ「若者たちの神々」（第7回）に村上氏が登場したことであろう。「若者たちの神々」は、同誌編集長（現・ニュースキャスター）の筑紫哲也氏が聞き手を務めた人気企画だった。それだけにこの記事は、おそらく一般の日本人、特に文学愛好者にとどまらない幅広い若者層の間に「村上春樹」のイメージを定着させるうえで大きな影響を及ぼしたと思われる。

5ページにわたるロングインタビュで村上氏は、全共闘体験など筑紫氏の突っ込んだ質問に丁寧に答えている。「七〇年に、まあ、それなりに闘ったことの落とし前は、自分の中ではつげなくちゃいけないと思っているわけだ」との発言は興味深い。村上氏の生活をうかがわせる写真もふんだんに掲載されている。氏が猫を抱く様子や、「毎日一〇キロは走る」とキャプショ



村上春樹の主な作品

1979	『風の歌を聴け』 (第22回群像新人文学賞受賞)
1980	『1973年のピンボール』
1982	『羊をめぐる冒険』
1983	『中国行きのスロウ・ボート』 『カンガルー日和』
1984	『螢・納屋を焼く・その他の短編』
1985	『世界の終りとハードボイルド・ワン ダーランド』(第21回谷崎潤一郎賞受賞) 『回転木馬のデッド・ヒート』
1986	『パン屋再襲撃』
1987	『ノルウェイの森』
1988	『ダンス・ダンス・ダンス』
1990	『TVピープル』 『雨天炎天』
1992	『国境の南、太陽の西』
1994 ～95	『ねじまき鳥クロニクル』 (第47回読売文学賞受賞)
1995	『村上朝日堂超短編小説 夜のくもざる』
1996	『レキシントンの幽霊』
1997	『アンダーグラウンド』
1998	『約束された場所で—underground 2』 (第2回桑原武夫芸芸賞受賞) 『辺境・近境』
1999	『スプートニクの恋人』
2000	『神の子どもたちはみな踊る』
2001	『シドニー!』
2002	『海辺のカフカ』
2004	『アフターダーク』
2005	『東京奇譚集』

ードとカセットテープが並んだ部屋など、「村上春樹」を語るためのおなじみのアイテムが出揃っている感がある。

「村上春樹ブーム」の到来へ

ここまでが最初に述べた「村上春樹」像の第1期に当たる。85年の第21回谷崎潤一郎賞受賞（対象は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』）を、続く第2期の画期としたのは、このあと、村上氏が一般紙誌に登場する数が急増するからだ。紙数も残り少ないので以下は簡単に述べるが、一つの話性は、『東京新聞』85年9月26日朝刊が報じたように、村上氏が同賞を「戦後生まれで初めて受賞」した「若さ

に求められた。

一般の目には、「若者の支持が高く、久しぶり登場の売れる純文学作家」(『産経』9月25日夕刊)が、中堅作家の秀作に与えられる同賞を得たことは「大人」文壇にも実力を高く評価された証と映ったであろう。「都会的で洗練された感性の作風」(『朝日』10月20日朝刊)がピンとこない人々にして「引越越し魔」で「講演依頼やテレビ、ラジオ、CMへの出演は一切お断り」(『東京』10月5日夕刊)といった個性は興味を引いたに違いない。

あえて図式的に述べれば、「熱狂的ファン」(『毎日』11月18日朝刊)の周囲に濃淡さまざまな関心を寄せる層が加

わったことにより、「村上現象」(同。括弧付きに注意)はその準備を完了する。これが、「村上春樹ブーム」(『毎日』88年12月19日朝刊)として花開くのが、『ノルウェイの森』刊行後の第3期である。以後、村上作品はベストセラーの常連となり、その人気自体が社会現象として分析されるようになる。

「ハルキ・ばなな現象」とか「ダブル村上」といった言葉がジャーナリズムで消費されていくのだが、銘記すべきはこの時期の大半、村上氏自身は日本での騒ぎをよそに欧米での滞在を続け、真摯に執筆活動を進めていたことだ。

その村上氏が95年の阪神大震災と地下鉄サリン事件を機に帰国を決断し、「デタッチメントからコミットメントへ」の転回を遂げたのは、あまりに有名な話である。それが形となって現れ、一般にも衝撃を与えたのが『アンダーグラウンド』以後のノンフィクション作品を中心とする第4期の仕事だった。

そして、21世紀の現在、村上氏は、過去の日本の作家が誰一人経験したことのない「世界性」のなかに立っている。この状況の新しいさは、『海辺のカフカ』(02年)が欧米アジアの各地で呼び起こした反響を伝える、ここ数年の報道を思い起こすだけで十分だろう。